

〈自分たちでつくるみんなの学校 ～みんなが笑顔になる学校を目指して～〉



# 成美っ子

学校だより 令和6年度No.10

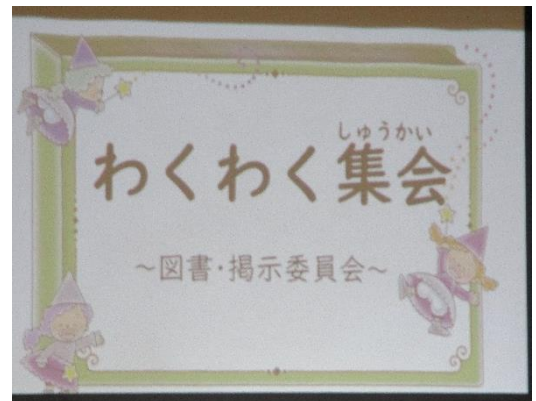
## 本との出会いを大切に！

校長 原野 恵子

全国学校図書館協議会は、このほど、「第69回学校読書調査の結果」を機関誌(11月号)を通じて公表しました。今年5月の1か月間に読んだ本は、「小学生で13.8冊、中学生で4.1冊、高校生で1.7冊」でした。男女とも、学年が上がるにつれて読書冊数が減少傾向にあります。また、「本を読むことは大切だと思うか」という質問に、「大切だと思う」「どちらかといえば大切だと思う」と回答したのは、「小学生で91.8%、中・高校生も9割近い」結果であったということです。子供たちは、読書の大切さについて、よく考えているようです。それなのに、成長の過程で、読書とは疎遠になる傾向が強いことが、残念でなりません。私事で大変恐縮ですが、「寝る前の10分間読書」を中学校時代の国語科の先生に勧めていただき、今でも習慣になっています。学業や人間関係、将来の進路等で悩むことが多い思春期を、何とか乗り越えることができた要因の一つに、読書という糧があったことを、今懐かしく振り返っています。

「人の成長は、『人』『旅』『本』との出会いや出会いで促されることが多い」と、言われます。確かに、苦しいとき、悲しいときの打開策だけでなく、進む道や夢を求めたいとき等にも、この3つからヒントを得られることが多いように思います。「人」や「旅」に関するものは、自分一人の都合で決められるものではありません。しかし、唯一「本」だけは、自分で時と場所、場合を選ぶ自由度が高いもののように思えます。これからの未来を生きる子供たちにとって、素敵な「本」との出会いには無限の可能性へのドアがありそうです。

学校では、子供たちに、読書をより楽しいものであると感じてもらいたいと願い、図書・掲示委員会が中心となって、先月30日に「わくわく集会」を開催しました。「低・中・高学年別のお薦めの本の紹介」「たくさん本を読んだ人の表彰」等、短い時間でしたが内容の濃いものでした。中でも、「失敗しても、大丈夫だよ」という内容の本の紹介については、子供たちは息をするのも忘れたかのように静かに聞き入っていました。また、表彰では、200冊以上読んでいる子供がいることに、驚きを隠せない様子でした。そして、読書への意欲を高めていました。



【図書・掲示委員会の集会より】

現在、お子さんは、何冊読んでおられるでしょうか。学校では、「ファミリー読書の日」を設定し、家庭でも本に親しむ環境づくりに協力いただいております。この期間に関わらず、ご家庭でも食卓の話題に上げていただいていることと思います。皆様には、「自分が読んで面白かった本を、一緒に読み返す」「ほっこりする絵本を、一文ずつ交代で読む」等、楽しいひとときをつくっていただくことが、子供たちに『読書』=『楽しいもの』という考えを育み、読書習慣の定着により効果をもたらすようです。「よい本との出会い」は、一生を通じて、子供たちを支えます。

これからの厳冬の季節、長い夜に、「親子読書を、まずは10分間」、いかがでしょうか。